

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

10月5日にパリロンシャン競馬場で行われた第98回凱旋門賞(芝2400m)で、ヴァルドガイスト(牡5、父ガリレオ)を優勝に導いたピエール・シャルル・ブド騎手(26歳)が、今週のこのコラムの主役である。

既にご承知おきのように、今年の凱旋門賞でオッズ1・5倍の圧倒的1番人気には推されたのは、レース史上初の3連覇がかかつていたエネイブル(牝5、父ナサニエル)だった。極めて高い能力を持ち、常に馬体を併せての競り合いになれば絶対に負けないのがエネイブルで、逆に言えば、万に一つでも彼女を破る馬が現れる所したら、ゴール寸前で大外を急襲し、早めに抜け出している彼女に「出し抜け」を喰らわす以外に、ありえないだろうというのが戦前の下馬評だった。

その、これしかないという競馬を見事にやつてのけたのが、ヴァルドガイストとブドであった。直線での攻防を改めて検証すると、ブドとヴァルドガイストは一旦は馬群の真ん中を割ろうとし、進路がなくて仕方なく外にスイッチした後に末脚を伸ばしている。馬群を割ろうとした時に進路が確保されいたら、ひょっとするとゴール前でエネイブルと馬体があつていたかもしれない、そうであつたなら凱旋門賞の結果も違つたものとなつていた可能性がある。つまり、図らずも大外強襲というスタイルとなつたのが、運も味方に付けて凱

スルトナフタブドは、運も味方に付けて凱旋門賞制覇を手にしたと言えよう。

もちろん、確固たる技術がなければ、幸運を活かすことが出来なかつたことも確かだ。

調教師マルク・ブドの子息として92年

12月21日に生まれたピエール・シャルル・ブドは、グヴェーにある競馬学校を卒業後、名門アンドレ・ファーブル厩舎から見習い騎手としてデビュー。08年4月19日にメラル競馬場で行われた条件戦(芝2600m)を自厩舎のパンピーナに騎乗して制し、プロとしての初勝利を挙げている。

10年9月5日には、自厩舎のブリガンタンに騎乗してロンシャンのリュテス賞(芝3000m)を制し重賞初制覇を達成。翌12年には年間で122勝をあげてリーディング3位に台頭し、若手のホープと目されることになったブドは、14年7月13日、これも自厩舎のガランテでロンシャンのG1パリ大賞(芝2400m)を制し、G1初制覇を果たした。

ブドが初めて単騎免許を取得して日本で騎乗したのが、14年秋だつたが、ここで彼がやらかした「事件」をご記憶の皆様も多いと思う。身長173センチの彼は普段から体重維持が容易ではなかつたのかもしれないが、14年秋以降は、16年のG1ジャパンCでイラブトの手綱をとつたのが日本における唯一の騎乗となつてゐるが、ぜひ再来日して、ひと回りもふた回りも成長した姿を、日本のファンに見せて欲しいものである。

14年秋以降は、16年のG1ジャパンCでイラブトの手綱をとつたのが日本における唯一の騎乗となつてゐるが、ぜひ再来日して、ひと回りもふた回りも成長した姿を、日本のファンに見せて欲しいものである。

ここで彼がとつたのが、乗馬靴を脱いで靴下のみで騎乗するという奇策だつたのだ。12番人気のノワールギャルソンを2着に持つてきたのだから、見事な騎乗ではあつたのだが、馬装に関する注意義務を怠つたとして、戒告処分を受けたのである。この時、裁決委員の諮問に対し「仏国では騎手はよく、靴下で騎乗する」という真つ赤な嘘をついたとか、つかなかつたとか!。この秋のブドは、免許期間を満了する前に帰国している。

「靴下ブド」というありがたくないレッテルを日本では貼られた彼だつたが、翌15年には年間で179勝を挙げ、クリストフ・スマヨンと横並びで、自身初めてとなる仏国リーディングを獲得。翌16年には301勝という驚異的な数の勝ち星をあげ、欧州における騎手の年間最多勝記録を樹立したのである。

そして、2歳9月のデビューからコンビを組んできたヴァルドガイストで、凱旋門賞制覇という大殊勲を成し遂げたブド。14年秋以降は、16年のG1ジャパンCでイラブトの手綱をとつたのが日本における唯一の騎乗となつてゐるが、ぜひ再来日して、ひと回りもふた回りも成長した姿を、日本のファンに見せて欲しいものである。